

《オ段長音の開合》研究史抄

樋野幸男

0. はじめに

中世後期の室町時代は、日本語の音韻の歴史においても、さまざまな変化の生じた期間であった。とりわけ〈オ段長音の開合〉と〈四つ仮名〉とは、極めて興味をひく問題であり、多くの研究がなされてきた。本稿では〈オ段長音の開合〉について、その研究の歴史を振り返ってみたい。^{註1}

はじめに〈オ段長音の開合〉とは何か、簡単に解説する。

平安中期以降、日本語にはまれであった母音の連続が、漢字音の影響や、音便の発生にともな^{註2}って、日常の言語生活に実現することが定着した。そこで、[ア段音+ウ/オ段音+ウ]という二重母音が、発音の経済的欲求(なまけること)から、ともに長音となる傾向が生じたが、両者は別の音として地位を得ていたことから、それぞれ音韻論的に対立したオ段の長音として、区別して発音されることとなった。前者を〈開音〉(＝相対的に開いたオ段の長音)、後者を〈合音〉(＝相対的に閉じたオ段の長音)という。そもそも〈開合〉は、中国音韻学の術語であった。

1. 音韻史研究の方法

オ段長音の音韻の歴史を研究するには、その当時書かれた文献を検討するという方法しか、基本的にはあり得ない。なぜなら、実際に発音した音声が保存できるようになったのは、レコードなどの音声記録装置が発明されてからのことだからである。したがって、研究の対象となり得るものは、文字言語として料紙に記録された文献資料のみとなる。

そして、問題は、日本語文献の場合、オ段の長音もその時代の限られた数の仮名という文字によって表記されているという点にある。つまり、たとえば中世のある時期のある文献の書記者におけるオ段長音の開合の意識(音韻論的対立の存否)がどうであったかを探ろうとすると、その人物が、

(A) 上層階級に所属するため、仮名遣の意識が厳格である。

(B) 下層階級に所属するため、仮名遣の意識が未発達である。

という可能性が想定されるので、表記に現れた開合の正誤の状況からは、その区別が存したか否かの判断は極めて困難である。なぜなら、(A)の場合、かりに開合の区別が混乱していても、仮名遣の意識から正しい表記を実行することが可能であるし、(B)の場合、かりに開合の区別が混乱していなくても、仮名遣から束縛されないため、自由な表音的表記を実行する可能性があるからである。^{註3}というのは、[ア段音+ウ]から変容した開音が、かりに[o:]という音価であったとき(合音は[o:]とする)、本来[au]から生じた音であろうと、その時点で[au]より[o:]に近い音であったとするならば、合音として[o:]が存在しても、「オ段の仮名+ウ」で表記することは、必ずしもあり得ないことではないからである。換言すれば、[o:]を標示する専用の仮名が、従来の仮名体系とは別に存在しない限り、仕方がないことである。^{註4}付言すると、「アウ」は本来[o:]を

表わす仮名綴りではなく、[au]を表わすのがその役割なのである。^{注5}開合にとって、その点が後世に大きな疑惑を生じる発端になったといえる。仮名表記を手掛かりとすると、慎重な態度が要求される。

2. 研究史〈黎明期〉

オ段の長音に、開音／合音の二種があることを説いたのは、実質的に橋本進吉(1928)をもって嚆矢とする。^{注6}橋本は、キリシタン文献の『文祿元年天草版吉利支丹教義(ドチリイナキリシタン)』の調査結果をもとに、

……「かう」「きやう」などア段の仮名を含んだものと、「きよう」「けう」などオ段又はエ段の仮名を含んだものとの混同は、室町時代まではまだ無かつたやうであるし、假名遣の書に於て、この兩類の假名遣を説いたのは江戸時代以後の事であり、又謠曲の謠方に於ては、江戸時代になつても開合と稱へて此の兩類の發音を區別して居る。これ等の事實に照しても、此の書の編まれた時代に於て、此の兩類の發音に差異があつた事を認めなければなるまい。(本書の寫音法)の節、232頁)

と述べて、開音「ō」／合音「ô」の表記で現れるオ段の長音が、それぞれ異なつた「發音」を表わすと考えた。そして、橋本は仮名遣から「アウの類」「オウの類」「エウの類」と分類し、音の変遷の経路を推測した。オウの類とエウの類は、当時すでに「同じ o の長音を有する」として、アウの類から変容したオ段の長音が「ō」であり、オウの類・エウの類から変容したオ段の長音が「ô」であるとした。橋本の推定は、次のとおりである。

アウの類 au > ao > ɔ:

オウの類 ou > oo > ô

エウの類 eu > eo > êō > iō > yō (「發音」の節、254頁)^{注7}

そして、次のように結論付けた。

さすればōの字を宛てたものは、開音のオの長音であつて、之に對してôの字を宛てたものは、普通のオ、即、合音のオの長音であつたのである。(同、255頁)

しかし、この推論では明確な証拠が提示されていない。さらに、ロドリゲス『日本大文典』の記述を援用して、ポルトガル語の發音^{注8}とを対照した論述(同、256頁)については、当時のポルトガル語正書法の観点から疑念が生じる。このような開合の音価の推定は、16世紀末の文献資料によるものであるから、中世全般にわたる音価の変遷については、さらなる調査・研究が期待される。

3. 研究史〈展開期〉

橋本(1928)が、開音=[ɔ:]／合音=[o:]と音価を推定して以降、新たな研究の展開が、吉川泰雄(1954)から始まった。^{注9}それは、オ段拗長音の合音とウ段拗長音との表記交替の現象を、中世から近世にかけての文献から多くの語例を採集して指摘したものであった。たとえば、推量表現の「見む」から生じた「見う」が、「見ゅう」から「見よう」へ変容した。吉川はこの現象を、……上一・二段動詞よりも遙かに多數顯著であつた下二段形式用言の推量形に同化せられたものであると説くのが通常である。此れは併し、其原因のなほ一半を解くに過ぎまい。

近古の資料を覽てると、當時音韻上の顯著な趨勢として、長拗音「よう」「ゆう」兩種の韻が極めて屢々相互に轉訛を通じてゐるのが知れる。(357頁)

このように捉えている。さらに、コリヤード『日本文典』の記述などから、開合の音価を「合音¹⁰」は變長音であり、¹¹Öや¹²Ûは均長音である」と解釈し、「其後變遷の大勢ではOUはOOに併され、方言としては九州音韻の如くUUに併された」と考えた(375頁)。これは橋本の音価説と異なるが、論述において、橋本説には一切言及していない。そして、オ段長音の開合との関係については、

近古に著明な一音韻傾向「よう」「ゆう」韻相互轉訛も、まづ¹⁰ôと¹¹ûとの相互轉訛の一部に属するが、「ゆう」「よう」韻の互訛は、殘餘の¹²Ö(Ö)・¹³Û韻互訛の總和より夥しい。(375頁) 文献上の出現頻度に格段の差を認めながらも、拗長音に固有の現象ではなく、合音とウ段長音の間の「相互轉訛」と位置付けた。吉川は、両者が音声的に峻別し難い状況にあったという捉え方はしていない。その後、大田栄太郎・山田忠雄(1962)は、元龜二年本『運歩色葉集』(京大図書館蔵)および『和漢朗詠集¹⁴私注』に現れる類例の調査から、

……広い意味では勿論、開合の乱れといふことになるかもしれないが、より厳密な意味では、長拗音のうち合音における発音の不明瞭、もしくは無自覚に基く表記の矛盾・不統一と考へた方がよくはないか。(632頁)

……吉川氏が一概に-yûの発音と見做したところのものを、-yûとも-yôともつかぬ、曖昧な中途半端の発音なるが故に表記に躊躇・ためらひが生じ、或は二途に分かれたものではないかと考へて来た……(633頁)

中世末期にオ段拗長音の合音が、ウ段拗長音との聞き分けに困難が生じるような「-yûとも-yôともつかぬ、曖昧な中途半端の発音」になっていたと考えた。表記の実態については、吉川と同様に把握するが、両者の音価の推定は異なる。さらに、福島邦道(1969)は、¹⁵キリシタン文献に現れる「見ゅう」と「見よう」の二つの形に着目し、

……「見ゅう」のような未来形も、漢字音のユウ韻も、発音としては変わらないのであって、「見よう」と「見ゅう」の交替もまた、漢字音のヨウ韻とユウ韻の交替と、発音傾向としては軌を一にしてあらわれているのである。(205頁)

ミウ>ミュウ⇄ミョウ>ミョウと変容した結果、「ヨウ」が析出されて、文法形式「よう」が成立する過程を検証した。先行研究においては、主として漢字音(字音語)が問題の中核をなしていたのに対し、福島は、純粹な和語の場合も同様に¹⁶見なしうる¹⁷と主張した。これまで、オ段長音の開合は、拗長音を中心に論じられたが、¹⁸迫野虔徳(1975)は、室町時代末期に書写された¹⁹右田毛利家伝来本『源氏物語古註』などを手掛かりとして、オ段・ウ段の表記交替現象は、拗長音に限るものではなく、直長音にも存する現象であることを提唱した。その上で、中世末期には、オ段長音の合音とウ段長音とが相互に非常に似かよった音声として実現され得る音価を有していたとして、問題を発展させた。そして、²⁰迫野によれば、

中世末頃に頻出するウ段長音とオ段長音の合音との表記のゆれは、開音に押された合音がなお開音との距離を保とうとして、自らを狭い閉じた形におし下げた、その結果生じたものと思われる。(168頁)

つまり、中世のある時期に開音／合音の一对が、橋本説の音価から、両者の「距離を保」ちながらウ段長音に接近する形で推移した。しかし、この推論には重大な疑念を禁じ得ない。²¹迫野は、²²ロドリゲス『日本大文典』の次の記述に注目する。「長音の²³ûに関する附記」の条。

○この長音の²⁴ûは正しくは「すばる」(Suboru)の下に包含されるものである。何故かといふに、唇をせばめ口を閉ぢる点でその発音が実際に極めてよく似てゐるからであって、「²⁵下」(Ximo)などで、唇を狭め口を閉ぢることを過度にするといふ意で、Subori suguru(すばり過ぐる)と言つてゐるやうに、「すばる」(Subaru)ôの発音が悪くて²⁶ûとなる地方もあるのである。「すばる」(Subaru)ôと区別する為には²⁷Fiqu(引く)、又は、²⁸nagamuru(長むる)û

と呼ぶ。(土井忠生訳、630頁)

そして、吉川の合音^{FE15}=[ou]という解釈に異議を唱えて、二重母音ではなく「同化音」(=長母音)であることを主張した。

キリシタン文献の記述からすれば、中世末頃のオ段長音の合音は、ウ段長音にまがうような閉じた狭い発音であった……(162頁)

その疑念とは、中世末頃については、橋本説と異なる音価を唱えながらも、それ以前については、それをそのまま踏襲している点である。なぜなら、異なった見解を提出した段階で、橋本の推定を御破算としたのであって、それ以前の音価については、改めて検討を要する課題であるはずだからである。

4. 研究史〈収斂期〉

これまでの研究を受けて、新たな局面が開拓された。まず、川上葵(1980)が、「「ひろがる」つまり開音は[o:]という長母音をもち、「すばる」つまり合音は[ou]という二重母音をもつ」(6頁)と音価を推定した。その後、豊島正之(1984)が、新たな見地から論究した。豊島は、次のように結論づけた。

中世末・江戸初期の「開合」は、オ段長音のみならず五母音に就ても考え得、その分類原理は「広狭」ではなく「まるめ」である……

オ段長音の開合の音価は、ロドリゲス文典以外に依拠すべき資料が無いが、その記事は、開=oo(o:)、合=ou(ow)を示している。(152頁)

推定する音価は川上と同じであるが、推論の方法が異なる。

さて、川上の論拠は、次の3点である。

① [ɔ]と[o]の差はやや微妙すぎて、聞き分け言い分けるのに困難が大きすぎるのではないか……

② その前もあとも五母音で安定していた日本語が、その一時期だけ六母音であったとは、ほとんど考えられない……

③ 「ひろがる」「すばる」という言葉は、ごく素直に受取るならば「広くなる」「狭くなる」の意である。「広い」「狭い」ではない。(5頁)

しかし、この説明にはいずれも難点があると考える。仮に通説となっている橋本説を擁護する立場から反論を試みる。

①に対して——[o:]と[ou]との方が、[ɔ]と[o:]とに比して、聞き分け、言い分けがより容易であるという点に関しては、事実であろう。だが、そうだとすると、「聞き分け言い分け」が容易な両者が、混乱して同一音に帰するには、何らかの力が音韻的環境に働いたと見なければならぬ。「やや微妙すぎ」たからこそ、混乱へと移行したのではないか。

②に対して——五母音体系で安定していたとしても、そこに音韻的環境の変化によって、長母音に限って一時的に六母音体系に変化せざるを得なくなることも、可能性として否定できない。また、不安定な状態であったからこそ、「一時期だけ」で終わり、安定した状態にもどったとも考えられる。短期間でなく長期間であったとすると、事態は異なるのだが。

③に対して——ロドリゲス『日本大文典』に「ひろがる／すばる」と併記された「すむ／にごる」(土井忠生訳、629頁)は、「すんだ／にごった」状態を示しており、動作を示す範疇ではない。これと同様に「ひろがった／すばった」状態を示すと解釈するのは、それほど無理なこととは思えない。また、「長音のゐに関する附記」(前掲)によれば、ウ段長音との類似性が強いと考えられる。よって、合音を明確な二重母音と見なすのは難しく、「すばる」を「狭くなる」動作とす

る積極的根拠はないようである。^{注17}

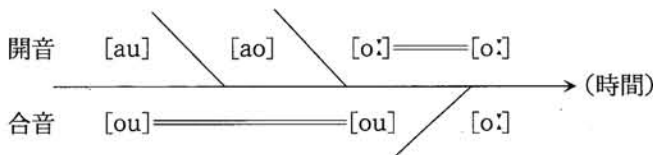
このような点を考慮すると、川上の論拠は、その音価を主張するに十分ではなかった。次に、豊島は明確な根拠を提示した。第一に、中世末の謡曲伝書に記載された五十音図に見える五母音の記事を分析し、ア・イ・エ＝「開」／ウ・オ＝「合」であり、五母音の開合が「まるめ」による分類であることを見出した(150頁)。その上で、室町時代末の能伝書『申楽聞書』の記事を整理して、ア段音・エ段音・オ段長音の開音＝「開」／オ段音・オ段長音の合音・ウ段長音＝「合」であり、音の長短に関係なく、両類の対立が「まるめ」によるものであって、オ段長音の開合も「まるめ」が分類原理であると結論付けた(149頁)。第二に、開合の音価を直接記述するのは、ロドリゲス『日本大文典・小文典』の「開音＝oo, 合音＝ouという記事」のみで、橋本は「oo/ou」をポルトガル語の綴り字と考えたが、豊島は「特に音を示すためにロドリゲスが臨時に作った綴り字」と推論した。そして、前述の音価を得た(145頁)。

5. 新たな音価説へ

川上(1980)、豊島(1984)の推定する音価は、高い蓋然性をもつと考えられるが、なお、不審な点が散見する。そこで、開音＝[o:]^{注18}／合音＝[ou]という音価説が内包する問題点について考えてみる。

第一は、[エ段音＋ウ]が[オ段音＋ウ]に合流して、オ段長音の合音を形成したことである。当然ながら[eu]と[ou]とが、そのままの形で合流したとは考えられない。橋本説の場合、[eu]が[eo]を経て[jo:]となれば、合音[o:]に合流できるが、合音[ou]説の場合、[eu]が[jou]となる音韻変化の過程を想定するのは困難である。なぜならば、[eu]から[(j)o]を要素とする音へと変化する過程には、[e]と[u]とが一つの音に同化しようとする相互同化の作用が不可欠であって、その結果[(j)o]が形成され、かつ[u]も保存されて、二重母音が生まれるというのは考え難いからである。もし、[(j)ou]という二重母音であったとすれば、[o]と[u]との中間的な母音の長音が、再び変化を起こしたと見なすしかない。ここでは、二重母音から長母音へという音韻変化の自然な流れに遡上するだけの十分な理由を見出さない限り、[jo:]の近似音から[jou]への変化は説明できない。^{注19}

第二は、[オ段音＋ウ]に由来する合音のみが、[ou]という二重母音の形を保存したと考える点である。開音の変遷(au>ao>o:)において、川上、豊島ともに、[au]が[o:]に変化したことは認めている。つまり、二重母音の長音化の傾向は、開音の変遷において肯定する一方で、合音の場合には、[ou]から[o:]への変化を否定して、[ou]のままであったとする点である。合音[ou]説では、[ou]が[o:]へ変化した時期は、開合の区別を混乱させる時期を敢えて選択したことになる。つまり、開音が[au]～[ao]の時代であれば、合音が[o:]に変化しても、開合の区別に支障はない。そのような時期を回避したことになる(下図参照)。



このように考えると、合音[ou]説の場合、それまで何らかの理由によって、ou>o:の変化が阻止されていたが、ある時期に、開合の区別を放棄しようとする主体的な意識が芽ばえて、人々みずから開合の区別に別れを告げたと解釈される。

6. おわりに

これまでの検討から、最も慎重な吟味を要する点は、合音＝[ou]である。これを、[ou]＝[o]＋[u]という意味に極度に限定して考えると、[o]と[u]とに割って発音するものと理解することになる。ここが難点である。

さて、豊島(1984)による合音の音韻論的な解釈/ou/を積極的に適用すれば、音声的実現として、ある程度の幅が許容される(145頁)。もし、/ou/が、[o]から[u]になめらかに変化する一種の変長音^{注20}であるとするならば、前述の諸問題は一挙に解消するといえよう。

筆者は、迫野(1975)が推定した中世末頃の音価については同意する。しかし、橋本説の音価から「開音が合音の形にすりかわる形で推移したであろう」という見解には反対である。

最後に、私見を述べて締め括りとしたい。

- (I) 開音は[o]、合音は、[o]と[u]との中間的な母音の長音、あるいは[o]から[u]へとなめらかに変化する一種の変長音であった。
- (II) それは橋本説の音価からそのように推移したのではなく、オ段の長音の開合の区別が生じた時点において、すでにそうであった。

注

- 1 本稿では、文献資料による論考を取り上げる。現代日本語の方言からの研究については、別の機会にゆずる。
- 2 馬淵和夫(1971)は、音便とは「発音をなるべくなまけること」であり、「文節内の発音のゆるみの現象」(91頁)と考える。このことは、ア段音／オ段音を語幹末尾にもつ活用語のウ音便形が、オ段長音として具現する原因とも考えられる。
- 3 河野六郎(1977)によれば、
……文字の表音は表語の一つの手段に過ぎないということが判って来る。……聴覚的な音声連続を感覚の異なる視覚形象の文字にうつす(移・写)ことは厳密には不可能である。(20頁)
- 4 t入声音に関しては、従来の仮名体系の外に別の仮名字体を設けて表記した例が存在する。たとえば世阿弥(1363～1443)自筆の能本の中には「ツ」を小書きにして書き分けられた部分がある。
- 5 ハ行転呼音の場合、ワイウエヲで発音され、表記上も、ワイ(キ)ウエ(エ)ヲで実現することが多かったが、ワ行に2種類の相似した音が共存しなかった点、幸運であった。
- 6 本稿では、橋本進吉(1961)を用いた。同書、第三部「(文祿元年天草版)吉利支丹教義の用語について」第一章「文字と発音について」による。
- 7 橋本(1928)の音声標示による。
- 8 豊島正之(1984)による(後述)。また、丸山徹(1988)は、ロドリゲスによる文献のポルトガル語に付された「アセント符号」について、
……いづれにせよ、ロドリゲスにとって、版本、自筆本にかかわりなくアセント符号はほとんど随意的なもので、強勢やそれに伴う音色の違いに言及する時、同綴異語を意識して区別する時の他は、殊更、付ける必要のなかったものなのであろう。(74頁)
として、16・17世紀のポルトガル語アセント表記が「正書法としていまだ混沌とした情況」にあったことを検証した。

- 9 有坂秀世(1953)は、書写年代が「室町時代であらうか」という『和名集』について調査し、漢字音のヨウ韻とユウ韻の交替を指摘している。(本稿では、有坂(1957)所収の論文によった。)
- 10 山田忠雄の所蔵する「室町時代末期を下るまじく思はれる古写本」。
- 11 大田・山田(1962)は、開音／合音の音価について、その認識を明示していないため、具体性に欠ける発言と言わざるを得ないが、執筆の当時「通説」であった橋本(1928)説に立つと見るべきであろう。
- 12 本稿では、福島邦道(1973)を用いた。同書「第八章「見ゅう」と「見よう」の交替」による。
- 13 福島(1969)は、「純粋な和語における交替は、はなはだ少なく、漢字音における交替は非常に多い」(200頁)とするが、これは文献上の出現頻度についての認識を述べたものであろう。私見では、当時の言語生活においても、使用頻度では和語が漢語を圧倒することは否定し難い事実であり、そのため、文献の宿命として、特に辞書類では漢語を主体として編纂されることから、見かけ上、交替の例も漢語が多数を占めることとなる。
- 14 本稿では、迫野虔徳(1998)を用いた。同書「第三章 オ段長音の開合、第一節 オ段(合音)・ウ段長音表記の動揺」による。
- 15 迫野(1975)は、次のように記している。
 au や ou などの二重母音の形は、ある一時期以降は、現実には、その二重母音の形を解消して、同化音の形で行われることの方が一般的になったと思われる。(166頁)
- 16 迫野(1975)が、橋本(1928)の音価推定を踏襲していることは、次のように述べていることから明らかである。
 ……その音価の実質の面における展開は、開音が合音の形にすりかわる形で推移したであろうと推測される。(167頁)
- 17 豊島(1984)は、①については、[ɔ]と[o]を区別する言語が少なくない事実を指摘し、③については、「余り呼称にこだわるのは危険」と考えて、その論拠に否定的であるが、②については、「橋本説の含む難点を鋭く指摘した」として、肯定する(147・148頁)。
- 18 岡崎正繼(1988)は、川上や豊島の論考を検証する立場から、開合にかかわる16世紀のポルトガル語の表記と音価について、当時のポルトガル語の学者(3人)の著述を丹念に吟味した。その論旨を要約すると次のようである。
 当時、ポルトガル語の母音に〈o grande(大)／o pequeno(小)〉の区別があった。それは、「口の開きの広い o と狭い ɔ」(73頁)であった。そして、「縮約されて成った oo は勿論、o grande 或いは鋭アクセントを持つ ɔ についても oo と書くことはよくあった」(71頁)。また、3人とも「ou」を二重母音と認めている。以上から「ロドリゲスの日本語の開合の説明に見られる綴字の oo, ou は、ポルトガル語の綴字に依拠するものであるが、平明さを旨として用ゐたものである。」音価については、「ɔ は[o:]の蓋然性が高いが、ɔ は[o:]かも知れないし、[ou]かも知れない。」(69頁)
 綴り字については、豊島と齟齬するが、両者とも堅実な論証による結論である。音価については、明言していない。
- 19 川上(1980)は、当時、二重母音[ei]が存在したことから、狭くなる二重母音[ou]の存在を肯定しているが、[ou]の存在が合音=[ou]を証明することにはならない(6頁)。
 開音の方は、自然な流れに従って、二重母音[au]から長母音[o:]／[ɔ:]に変化したと考えられている。
 豊島(1984)は、合音[ou(ow)]の解釈を/ou/とする(145頁)。/ou/の音声的実現としては、母音のやや狭い[o:]の近似音も許容されよう。

- 20 あるいは、[o]と[u]との中間的な母音の長音であっても構わない。この音は、迫野(1998)が提示したものに等しい(162頁)。

文献一覧

- 橋本進吉(1928)『(文祿元年天草版)吉利支丹教義の研究』 東洋文庫論叢 第九、昭和3年、財団法人東洋文庫
 ———(1961)『キリシタン教義の研究』 橋本進吉博士著作集 第11冊、昭和36年、岩波書店
 有坂秀世(1953) 古辭書「和名集」について 『言語民俗論叢(金田一京助博士古稀記念)』 昭和28年、三省堂
 ———(1957)『國語音韻史の研究(増補新版)』 昭和32年、三省堂
 吉川泰雄(1954) 近古國語に於ける長拗音「ゆう」と「よう」との相關 國學院大學編『古典の新研究』第二集、昭和29年、明治書院
 大田栄太郎・山田忠雄(1962)『法明童子』解説 山田忠雄編『山田孝雄追憶史學・語學論集』 昭和37年、宝文館
 福島邦道(1969)「見ゅう」と「見よう」の交替 『佐伯梅友博士古稀記念國語學論集』 昭和44年、表現社
 ———(1973)『キリシタン資料と国語研究』 昭和48年、笠間書院
 馬淵和夫(1971)『國語音韻論』 昭和46年、笠間書院
 迫野虔徳(1975) オ・ウ段拗長音表記の動揺 『國語國文』第44巻 第3号、昭和50年
 ———(1998)『文献方言史研究』 平成10年、清文堂
 河野六郎(1977) 文字の本質 『岩波講座日本語8 文字』 昭和52年、岩波書店
 川上 葵(1980) アプ から オー まで 『國學院雜誌』第81巻 第7号、昭和55年
 豊島正之(1984)「開合」に就て 『國語学』136集、昭和59年
 岡崎正繼(1988) オ段長音の開合についてーロドリゲス『日本文典』覚書一 『湘南文学』第22号、昭和63年
 丸山 徹(1988) キリシタン資料「開合表記」成立の背景 『南山国文論集』第12号、昭和63年

(富山大学助教授)